

論文の内容の要旨

論文題目 進化論から地政学へ——近代日本における国際政治学の形成——

氏 名 春名展生

洋の東西を問わず、国際政治学は第一次大戦の反省に立ち、再び同じ惨禍を繰り返さないという使命を帯びて立ち上がったと考えられてきた。たしかに日本で国際政治学が制度的に確立した時期は通説と合致する。しかし当時の著述を繙くと、第一次大戦以前から知識人たちの間で共有されていた進化論が最初期の国際政治学に持ち込まれていた様子が見て取れる。このような制度的な起源と理論的な起源との不一致に着目して、大戦後に始動した国際政治学が進化論の系譜から何を受け継いだのかを探るのが本論文の趣旨である。それは国際政治学の前史を掘り起こす試みともいえよう。

このように進化論を手がかりに国際政治学の歴史を遡る本論文は、いわゆる社会進化論の研究としても新たな地平を切り開く。これまで社会進化論として関心を集めてきたのは、「生存競争」を通じて選抜された「適者」像をめぐる諸々の言説であった。しかし日本で最初に「国際政治学者」を自称した神川彦松は、ダーウィンの図式に即して「生存競争」が個体数の増殖に由来する論理を国際関係の説明に適用した。神川は『国際政治学概論』のなかで「国際政治進化の自然的根本動力は、政治集団の人口の増加である」と書いている。このような発想の発生と展開が描き出されれば、従来は看過されてきた思考の軌跡に光が当てられよう。

また本論文で叙述される思想史は、政治史の観点からも興味深い。取り上げられる諸学者が政治的な含意に富む言説を發し、その門下からは実際に政策の立案にかかわった人物が出ているからである。この思想と政治をつなぐ通路をたどれば、これまでは顧みられてこなかった政治史の側面が浮かび上がるかもしれない。

さて本論では、五人の学者に焦点を当てる。本論文の趣旨に照らして選ばれた五人は、第一に進化論を思索の指針として懐深くに取り込み、しかも第二に単発的に時局の分析や対応に当たるばかりではなく、ある程度の期間にわたって継続的に国際関係の本質を問う考察を試みた人物である。そして第三の基準として、五人をもとに曲がりなりにも連続した系譜を構成すべく、対論ないしは教授を通じて相互に接点をもった大学人を選択した。

まず第一章「「宇内統一国」か「生存競争の修羅場」か」は、進化論の受容をめぐる必ず論及される加藤弘之の思想に割かれている。加藤が「進化主義」を振りかざして自由民権運動の「天賦人権主義」を論駁したのは広く知られているが、その背後で同じく「優勝劣敗」の論理に依拠しながら、加藤が「宇内統一国」の仮説を擁護しつづけていた事実は、これまで等閑に付されてきた。第一章は、この希望的観測をめぐる加藤が見せた動揺を

描き出している。一口に「進化論」といっても、人口の継続的な増加が「生存競争」の発生を不可避にするダーウィンの学説からは「宇内統一国」の成立は導き出されず、それゆえに加藤はダーウィンをはずしつつ「優勝劣敗」の論理だけを温存して人類史の説明を試みた。しかし同時代の日本では「遊民」や「貧民」の増加を受けて人口の「過剰」への懸念が広がり、そのためにダーウィンの進化論が現実味を増していた。その風潮に押されて加藤もダーウィンの理論を全面的に受け入れ、以前とは一転して「極めて悲惨なる生存競争の修羅場」の到来を見通すに至る。

次の第二章「門戸開放」か「殖民政策」か」では、有賀長雄に焦点を当て、第一章と同様、結果的にはダーウィン進化論の台頭を映し出している。ただ前章と違い、加藤が争わずして自分からダーウィンの学説に屈したのに対し、有賀はダーウィンの思想の持ち主に果敢にも論戦を挑んでいる。その舞台となったのは、日露開戦前の『外交時報』誌上であった。

大学でスペンサーの哲学を学び、それに依拠して『社会進化論』を卒業して間もなく著した有賀は、故あって一度は社会学を断念した後に「国際関係の講究」を始める。このような中途の断絶ゆえ、これまで前後の連関は想定されてこなかった。しかし第二章では、有賀が社会学者として習得したスペンサーの思想に注目し、その残滓を国際法学者に転じた後の著述から拾い上げた。中央政府を欠いた国際関係の「社会」的な性格を有賀自身も明確に認識していただけに、社会学的な知見の流用には必ずしも違和感を覚えなかったであろう。スペンサーは「生存競争」が「協力分労」に転じる必然を唱えたが、それを国際関係に敷衍した有賀は、競争の熾烈な欧米諸国間でこそ「己れに宜く人に宜きの主義」が芽生え、「国際団結」が形成されつつあると観察している。このような思索の延長線上に立つ有賀は、満州の門戸開放によって日露で干戈を交える意味は失せると開戦前に主張した。

この有賀と『外交時報』誌上で論争を繰り広げたのは、いわゆる「七博士」を率いた戸水寛人である。戸水は人口の「過剰」を訴え、それを放出する地として朝鮮と満州を欲していた。このような立論の背後にはダーウィンの進化論が隠見するが、それを確認するため、第三章と第四章では戸水に同調した建部遯吾と小野塚喜平次 of 思想を検証する。

そこで第三章「資源への目覚め」では、まず建部遯吾に目を向けた。公然と戦争を賛美するなど、建部は独特の価値観ゆえに敬遠されてきたが、その思想を正視すると、端的に「地球の面積には限り有りて、人口の増殖は限り無い」と言い放つあたりにダーウィンの影響が見て取れる。このような人口と土地の必然的な不均衡を見据える建部は、実際に不足が顕在化する前に住地や食料を確保しておく必要性を説いて回り、その思想を「強国主義」と称した。その目標は「自国に於いて自国存立の保障を具有する国」であり、そのような発想から建部は著書として『食糧問題』を出し、また教え子から後に資源局長官となる人物を出した。その松井春生は、著書『日本資源政策』を執筆するにあたって「建部博士の博学に負う所大きいのを、今も感銘している」と回顧している。さらなる人口の増殖を「強国主義」の一環に据える建部は、あたかも自覚的に破局への邁進を唱えているが、

建部の創立した日本社会学院には政軍官学から多彩な顔ぶれが集った。とりわけ注目される会員は近衛文麿である。論文「英米本位の平和主義を排す」をはじめ、近衛の発言と建部の思想には共通項が少なくない。

じつは第四章「人口・資源・土地と「衆民主義」」で注目する小野塚喜平次も、政治学者ながら日本社会学院の会員であった。一般に「衆民主義」の首唱者として、とくに吉野作造や南原繁を育てた人物として知られる小野塚は、その一方で「生存競争ハ生物界ニ於ケル法則ニシテ人類モ亦其支配ヲ免ルハコト能ハス」と『政治学大綱』上に書き、日露戦争中には「人口過剰ニ苦シム優等文化ノ一強国ガ其近隣ニ於テ好殖民地タルニ適スル劣等文化ノ一弱国ヲ其膨脹範圍ト為シ得ル場合ニ於テ之ニ対シ如何ナル処分ヲ為スヘキカ」と問うた。このような発想の背景として第四章で指摘するのは、地理学者ラツツェルの影響である。『政治学大綱』を著した後に講義を再編した小野塚は、新たに「領土ノ政治的觀察」の部を設けている。これを受けた学生のなかから、地政学に傾倒する者が相次ぐ。

なお小野塚自身は、国家間の「生存競争」に身を投じる危うさを早くから感じ取っていた。その思いが大戦を機に高じて、東京帝国大学法学部内に「国際政治学講座」を新設する提案につながる。この創意を引き継いだのが第五章「国際政治学と地政学」の神川彦松である。一方で小野塚の企図を汲んで『国際連盟政策論』を出版した神川は、しかし他方で人口への関心をも小野塚より継承した。一九二四年にアメリカで排日移民法が成立すると、神川は日本が「史上稀に見る一大難関に遭著し」と危機感を募らせ、難局を打開するには「恰も歐洲人が劍を以て四方を征服し掠奪したように、劍を以て戦うが此目的到達の最も的確なる方策であるであろう」と凄んでみせている。この憤怒を抑えたのは国際連盟への期待であった。しかし満州事変、日中戦争へと対外情勢が進むのに合わせ、神川も国際連盟に見切りをつけ、独立独歩に活路を見出す。その際に神川が参照したのは地政学であった。

以上のように国際政治学とは、進化論の系譜から派生した一つの支流に過ぎない。なぜ小野塚が分岐に踏み切ったのかを問えば、未来を楽観するスペンサー思想ではなく、悲観的な展望を導き出すダーウィン進化論の受容と、そこに向かって邁進するのではなく、離脱を志す小野塚の個性が挙げられよう。その小野塚が懸念した国家間の「生存競争」は「過剰人口」の発生に由来し、その「過剰人口」が実質的には貧困者を意味していた以上、第一次大戦後に新たに立ち上がった国際政治学は当然ながら富の分配を重視した。神川の『国際連盟政策論』は、移民の自由や「原料品の公正なる分配」を主張している。その神川に「国際政治学」の特別講義を依頼された矢部貞治は「国際正義による富の分配」を訴えている。しかし、その思想が「東亜新秩序」や「大東亜共栄圏」の構想に動員された結果、それは戦後になると忘れ去られなければならない思想となった。